

# T 国 語 問 題

## 注 意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっています。HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。  
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は16ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は1〜3となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

### マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しくずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①	1	2	3	4	5
	○	○	●	○	○

(3と解答する場合)

一 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

少し前に二十人ほどの少人数の学生の講義で聞いてみたことがある。「君たちにとって自由は重要なものだと思うか」。当然、全員が「自由は大事なものだ」という。「では、現在、君たちは何かに不自由な思いをしており、自由が享受できていないと思うか」。すると、ほとんどが「別に問題はない」という。そこで続けて聞いてみる。「では、現在、日本の問題は、個人の自由が侵害されている点にあるのか、それとも、自由を縛るはずの道徳規範や拘束がゆるんでしまっている点にあるのか、そのどちらが問題なのだろうか」。これに対しては、おおよそ三分の二が「道徳、規範がホウカイ(1)していることのほうが問題だ」と答えるのである。

もちろん、これは、自由とは何かなどという厳密な議論を踏まえたものではないし、各学生の単なる印象に過ぎない。たまたま私の講義に出席した学生がそうした関心の傾向を持っていただけかもしれない。しかしそれでも、自由が侵害されている、自由が享受できていないという切迫した感じは、今日の日本の若者たちにはほとんどないといってもよいだろう。

こんなことなど、わざわざ若者に聞いてみなくても、彼らを見ていればわかるではないか、と読者はおっしゃるかもしれない。確かに、今日の、とりわけ日本の若者ほど、自由気ままに二十四時間をフル活用で楽しんでいる者はいないであろう。ケータイやクルマやゲームセンターやファミレスなどという小道具や舞台にも事欠かない。

しかし、「自由」はいつもオビヤカ(2)かされ、自分が本当にやりたいことができず、何かによって縛られていると感じるのが、古今東西、若者の特権ではなかったろうか。ここで「特権」というのは、本当は彼らほど社会的に恵まれた立場にあつて、實際上、彼らほど自由な存在はないということである。特に、大学生であることは人生最良のモラトリアムである。

しかし、にもかかわらず、あるいは、だからこそ、若者ほど、自由を徹底的に謳歌(a)したがる者もいなかったし、

観念的であれ、自由はいつも侵害されているという憤りを持っていたものであった。社会的なしがらみや生計の不安がないからこそ、自由や社会正義のために現状を批判するのが若者の特権であつた。<sup>(1)</sup>

もしも、実感として「自由」が侵害されていないとなれば、かつてなら、「われわれは資本主義的な管理システムによって飼いならされている」などという理屈をひねり出したものであつた。「見かけ上の自由がたっぷり与えられていることこそが実は不自由なのだ」などという一見気の利いたことをいう者もいたはずである。ともかくも、若者にとつては、われわれが生きているこの社会は、人間の自由を抑圧する不合理なものでなければならぬのであつた。

ところが、今日の学生たちは、そのような感覚も理屈も感じないように見える。ついでに、「仮に何かをしたために、いま、自由が欲しいとすれば、その『何か』とは何なのだろうか」とたずねてみた。ひと通り聞いてはみたのだが、ほとんど答えらしいものは返ってこないのである。これはいったいどうしたことであらうか。

確かに、「自由」が大事なものであることにひとまず誰もが同意するであらう。しかし、「自由」が現代社会で本當に問題なのかどうかというと、よくわからない。

ということは、「自由」が、もしも、本来、人間にとつて第一級の課題だとすると、われわれは今日、その第一級の課題についてもはや強い関心を持ってなくなっている、ということにならう。今日の思想の衰退、世の中に対する切迫した関心の衰退、もつといえは全般的な生の衰弱といった事態は、このことと決して無関係ではないようにも思われる。

それにもかかわらず、依然として自由は、少なくとも社会科学の最も重要なテーマとなっている。社会思想史、哲学、政治学、経済学を含めて、人間は自由であるべきであるし、本来、自由な存在だと説いている。自由の実は、今日の社会科学においてはシジョウウメイダイとみなされている。<sup>(2)</sup>

特に、政治哲学や社会学を中心とした「自由論」は、一九八〇年代末このかた最もホットなテーマであり、「自由の基礎づけ」や「自由の正当化」<sup>(注1)</sup>「リベラリズムの理論構成」といった議論が精力的に展開されてきた。また、

経済学でも、「新自由主義」<sup>(注2)</sup>を中心に、経済活動の自由を実現することこそが、今日の最大の経済上の課題だと主張されている。

こうして、一見したところ奇妙な情景が展開されているというほかない。専門家たちによる「自由」をめぐるこの上ない活発で精緻な論議と、一般的な「自由」に対する関心の衰弱の間には大きな乖離<sup>(b)</sup>が生じつつあるのだ。先の学生にしてもそうなのだが、一般的には、「自由」への要求は、今日のたとえば日本において決して切実なものではなくなっている。にもかかわらず、専門家たちは、多くの場合、アメリカのリベラリズムをめぐる論争を下敷きにしながら、「自由」についてのきわめて精緻な議論を展開しようとしている。

何か、この落差が私には気になるのである。

そして、考えてみれば、この両者は、ある意味では、同じことの二様のあらわれとっていえなくもない。

もしも、われわれが言論を統制され、生活も規制され、政治的にも抑圧された社会に生きておれば、誰も、何年にもわたって「自由についての理論」などを構想したり議論したりしようとはしないだろう。「自由の内容は何か」、「自由はどうして正当化されるのか」、といった小難しい議論を果てしなく続けるなどということは考えにくい。それよりも、いま、ここで「自由」を手に入れるために何らかの活動を起こそうとするのではないだろうか。「自由」とは何かと首をかしげ、論争する以前に、「自由」<sup>(3)</sup>が何であるかは明らかには必要としない。

こうした状況にあれば、「自由」の根拠が何であろうと、いま、ここでわれわれが必要としている「自由」が何であるか、は明らかなのである。「自由」とは何かと考えあぐねるよりも前に、「自由」とは何であるかを感じ取っているのである。そしてそのために身を挺して活動するものである。

しかし、われわれは、もはやそんな幸せな状態<sup>(4)</sup>にはいない。いや、その逆にわれわれははるかに幸せな時代に生きているというべきかもしれない。少なくとも、もつと贅沢な時代にいることは間違いないだろう。「自由」への要求がさほど切実なものではなくなった時代だからである。「自由」についての論争が延々と続くということ自体、いかに今日の日本では「自由」が切実なものではなくなってしまうたかを示している。だからこそ、「自由」

を改めてどのように定義し、どのように理解すればよいのかが「理論的な」テーマになってしまうのだ。そんな贅沢な時代と社会にわれわれは生きている。

だから、一般のレベルでの「自由」に対する関心の低下と、他方で、社会科学や哲学系の専門家の間での「自由」に対する関心の高揚は、ある意味では同じことの二様の側面といってもよいのではなからうか。

(佐伯啓思『自由とは何か』による)

(注) 1 リベラリズム——個人の自由を尊重しながら社会的公正を表現しようとする考え方。

2 新自由主義——市場での自由競争を中心とし、政府の機能を最小限にとどめようとする考え方。

## 問

(A) 線部(イ)～(ハ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書<sup>かいしよ</sup>で記すこと)

(B) 線部(a)・(b)の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(C) 線部(1)について。ここで言われる「若者の特権」の説明として最も適当なものを一つ選び、番号で答えよ。

- 1 すべてに不満を持ち、その気持ちを表現できること。
- 2 社会的束縛や生活の不安のもとで、現状を批判できること。
- 3 未熟者扱いされて、何をしても大目に見られること。
- 4 十分な自由がありながら、あえてそれに不満を持つこと。
- 5 自由を楽しめるのに、それを楽しんだりしないこと。

(D) ——— 線部(2)について。このことはどういうことか。その説明として最も適当なものを一つ選び、番号で答えよ。

1 本来自由と不自由は表裏一体であるということ。

2 ひととは自由を与えられると不安になり、かえって不自由を求めるということ。

3 見かけ上の自由とは、本来の自由ではないということ。

4 自由は不自由に簡単に転化するということ。

5 自由であると思うことは、実はそう思わされているという可能性があること。

(E) ——— 線部(3)について。「自由」が何であるかは明らかではなく。その理由を本文に即して、句読点とも三十字以内で記せ。

(F) ——— 線部(4)について。左記各項のうち、ここで言われる「幸せな状態」に合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 人生について難しく考えないで生きられること。

ロ 自分がしたいことやしなければならぬことがすぐに見つかること。

ハ 社会を良くすることが自分の生活改善につながると思えること。

ニ ひとりで好きに生きてよいと考えられること。

ホ 自由について自由に徹底して理論的に研究できること。

(G) 左記各項のうち、本文に述べられている趣旨と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 今の学生たちも、「自由」の根柢が何であるかを論じられないが、それを感じ取っている。

ロ 現代の社会科学者たちは「自由」の根柢について、切迫した問題意識をもって盛んに研究している。

ハ 「自由」が抑圧されていた時代には、人は自由の大切さの意味を厳密に論じることができなかった。

ニ 日本における現代の精緻な「自由論」の多くはアメリカの論者の影響を受けている。  
ホ 現代の若者が「自由」を論じないのは、社会科学が厳密な「自由論」を展開しているためである。

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

私は、社会的に共有されるという意味での文章を成熟度の高い文章(あるいは文体)とよぶことにしている。そういう文章は、のように、さまざまな主題の表現のための多用性をもつものと思っている。

この点、漱石の存在はあざやかすぎるくらいである。かれの文章は、その時代ではケウ(イ)なほどに多用性に富み、人間に関するすべての事象をその文章で表現することができた。このことは、セザンヌという絵画史上の存在にも適用できる。セザンヌはただ絵を描いたのではなく、絵画を幾何学的に分析して造形理論を展開し、かれの理論を身につけさえすればたれもが絵画を構成することができるという一種の普遍性に達した。これに感動した同時代の後進であるゴーギャン(注1)にいたっては、さあ絵を描こう、というとき、さあ、セザンヌをやろう」と言っただけだったという。

漱石の門下やそのシシユク者(ロ)にとつて、言葉にこそ出さなかったが、文章については「漱石をやろう」という気分だったにちがいない。この意味で、漱石の文章は共有化され、やがて漱石自身とはかわりなく共有化されてゆく。文章史上、「漱石」におけるような性能をもち、似たような役割をはたしたものとして子規の散文があげられる。むろん鷗外も加えられるべきだが、露伴はすこしちがうかもしれない。

露伴の文学はもつと再認識されてもいいと私は思っているが、ただ、その文章にかぎっていえば漱石や子規とはちがいが、文学の重要な要素の一つである日常の些事(a)やグチ(b)をのべる性能をもたなかった。むろん、文学としてはむしろそこに露伴の特徴があるといっているが、しかし、こんにち、社会的に共有化されてしまった文章日本語の場からふりかえってみると、露伴の文章は成熟への過程に参加する度合がすくなかったような気がする。そのことがこんにち、露伴の日本語を身近でない存在にしているのではないか。

明治後の文章の歴史を考える上で、丘浅次郎(一八六八―一九四四)(1)は貴重な存在といっている。かれは漱石や子規とほぼ同年代に大学予備門(注2)に在学し、作文と歴史の二科目ができなくて連年落第したため、規定上、退学さ

せられた。無資格であるため、大学（理学部）も選科をえらばざるをえなかった。

このため、かれは明治の文章教師たちの「規範」<sup>2)</sup>を憎悪していた。丘は、動物の形態・分類学者としてすぐれた業績をあげたが、それ以上に進化論の紹介者として、また進化論的な文明批評家として、大正期における印象的な文章活動をした。

丘の文章は、地理の教科書のように事物を明晰にとり出し、叙述も平易である。たとえば『善と悪』（大正十四年）という高度な倫理学的主題について生物学の立場から展開した文章などは、述べかたが犀利で、論旨が明快なだけでなく、一種ふしぎな憂憤がこめられている。このため読む者は論理のすじをたどるだけでなく、文中の微妙な感情のなかにも快く入ってゆける。

丘のおもしろさは、大正期にその文章がいくつかの中等学校教科書に名文の例として掲載されていることである。明治十年代の後半に、作文で落第した人物が、大正末年には逆に文章の一規範にされているというところに、歴史を感じさせる。

丘に『落第と退校』（大正十五年）という文章がある。一部、抜粋する。

私が二年と二学期、予備門にいた間にすこぶる点の悪かった科目は、歴史のほかに漢学と作文とがあった。（中略）私の考えによれば、作文とは自分の言いたいと思うことを、読む人によくわからせるような文章を作る術であるが、私が予備門にいたころ（明治十五、十七年）の作文はそのようなものではなかった。むしろなるべく多数の人にわからぬような文章を作る術であった。例えば、金鳥が西の山に入ったとか、玉兔が東の海に出たとかというように、謎か、判じ物のような言葉を使うて文をつづり、一番わからぬ文章を書いた者が一番上等の点をもろうたように覚えている。

丘がこぼすのもむりはなく、旧文章は幕府の瓦解とともにほろんだとはいえ、学校教育の場にひそんで生きつづ

けていたのである。作文教師の多くは旧幕時代を経た漢学者だったが、かれらは文章というものは中国の典籍か故事などを踏まえて修辭するものだと思つていたため、丘のような文章は雑言としかおもえなかつたのにちがいない。

近代社会は、商品經濟の密度の高さと比例している。商品經濟の基礎は、物の質と量を明晰にすることを基礎としてゐるが、文章もまたその埒外<sup>b)</sup>ではない。

福沢諭吉の文章もまた、漱石以前において、新しい文章日本語の成熟のための影響力をもつた存在だつた。かれは、自分の文章は猿にさえ読めるように書くといつた人物であり、丘が落第した時期、『学問のすゝめ』や『文明論の概略』<sup>3)</sup>は新・古典に近かつた。それでも官学の牙城である大学予備門の作文教師の文章觀を変えさせるまでには至つていなかつたものとみえる。

以下、福沢に即してのべる。かれでさえ、自分の文章から脱皮したのは、六十すぎに刊行した『福翁自伝』(明治三十一年)においてである。明晰さにユーモアが加わり、さらには精神のいきいきした働きが文章の随処に光つてゐる。定評どおり自伝文學の白眉といつていいが、ただ重要なのはこれが文章意識をもつて書かれた文章ではなく、口述による速記であるということである。幕府瓦解までの自分とその周囲のひとびとの心の動き、進退についての人間くさいおかしさは、新時代らしい文章の書き手だつた福沢でさえ、自分が手造りした文章ではそれを表現しにくく、口述にたよつた。

福沢の時代のひとたちは、事柄を長しゃべりするとき(たとえば講釈師のように)つい七五調になつてしまう伝統があつたが、『福翁自伝』にもその氣配がにおう。このため内容の重さにくらべて、文体がやや軽忽<sup>c)</sup>になつてゐる。

しかし『福翁自伝』によつて知的軽忽さを楽しんだあと、すぐ漱石の『坊ちゃん』を読むと、響きとして同じ独奏を聴いてゐる感じがしないでもない。偶然なのか、影響があつたのか。私は論証なしに、あつたと思つたい。

(司馬遼太郎『この国のかたち 六』による)

- (注) 1 ゴーギャン——フランスの画家ポール・ゴーギャン(一八四八—一九〇三)のこと。  
2 大学予備門——明治初期における大学(東京大学)進学準備のための課程。

問

- (A) 〓 線部(イ)～(ハ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書<sup>かいしよ</sup>で記すこと)
- (B) 〓 線部(a)～(c)の読みを平仮名・現代仮名遣いで記せ。
- (C) 空欄  にはどのような言葉を補ったらよいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。
- (D) 〓 線部(1)について。「貴重な存在」であるのはどのような理由によるのか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。
- 1 大学予備門を退学させられたが、後に動物学者として成功したから。
  - 2 すぐれた動物の形態・分類学者であったとともに、進化論に関連して印象的な文章活動をしたから。
  - 3 書かれた文章は、論理が明快なだけではなく感情面の表現も分かりやすいものであったから。
  - 4 学校時代に作文で落第しながら、後にその分かりやすい文体が名文と評価されるようになったから。
  - 5 多数の人に分からぬような文章が評価された時代についての興味深いエピソードを後世に残したから。

(E) 線部(2)について。ここでいう「規範」とは具体的にどのようなことか。本文中からこれを示す一続きの部分抜き出し、二十字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(F) 線部(3)について。「新・古典」の説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 書かれて間もないが伝統的な事柄を扱った書物
- 2 新しい内容を古典的な文体でつづった書物
- 3 出て間もないが、永く読み継がれるべきとの評価を得た書物
- 4 新しい事象を扱って評判となった書物
- 5 出版されてすぐに内容が古くなってしまった書物

(G) 左記各項のうち、本文の趣旨と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 福沢の『福翁自伝』と漱石の『坊ちゃん』は、読むと共通の響きがあり、文体面で前者は後者に影響を与えたことが分かる。

ロ 丘が文章家として評価されるようになったのは、予備門で落第し大学は選科に行かざるを得なかったことがバネとなっている。

ハ 福沢の文章は一部口述に頼ったが、福沢後に登場した漱石は、筆記によって多用性に富む文体を編み出した。

ニ 社会的に共有される文章は、漱石の文章が示すように広く様々な事象の表現をカバーするもので、取るに足らないような日常の出来事や言動も描写できる。

ホ “セザンヌをやるう”、“漱石をやるう”という表現が可能なのは、セザンヌの絵と漱石の文章が共通して高い普遍性をもつゆえである。

三 左の文章は『源氏物語』の一節である。宇治の姫君の長女である大君が亡くなった後、次女の中君（匂宮の妻）と、大君を慕っていた薫大将はその面影を忘れられない。中君の暮らす都の邸に、異母姉妹の三女である浮舟が母親とともに訪れ、しばらく滞在することになる。ある日、匂宮が参内した留守に、薫が内裏からの帰りに立ち寄る場面である。これを読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

(1) 容貌(注1)も心ざまも、え憎にくむまじうらうたげなり。もの恥はぢもおどろおどろしからず、様さまよう児こめいたるものからかどなからず、近くさぶらふ人々にも、いとよく隠れてゐたまへり。ものなど言ひたるも、昔(4)の人の御(3)さまにあやしきまでおぼえたてまつりてぞあるや、かの人形(注2)求めたまふ人に見(注3)せたてまつらばやと、うち思(注3)ひ出でたまふをりしも、「大将(a)殿参りたまふ」と人聞(注4)こゆれば、例の、御几帳(注4)ひきつくりひて心づかひす。この客人(注5)の母君、「い(注5)で見たてまつらん。ほのかに見(注5)たてまつりける人のいみじきものに聞(注5)こゆめれど、宮の御ありさまにはえ並びたまはじ」と言へば、御前(注6)にさぶらふ人々、「いさや、えこそ聞(注6)こえ定め□□」(注6)と聞(注6)こえあへり。（浮舟の母君）「いかばかりならん人(注7)か、宮をば消(注7)ちたてまつらむ」など言ふほどに、今ぞ車(注7)より下りたまふなると聞(注7)くほど、かしがましきまで追(注7)ひののしりて、とみにも見(注7)えたまはず。待たれたるほどに、歩み入りたまふさまを見れば、げに、あなめでた、をかしげとも見えずながらぞ、なまめかしうきよげなるや。すずろに、見え苦しう恥(注8)づかしくて、額(注8)髪(注8)などもひきつくりはれて、心恥(注8)づかしげに用意(注8)多く際(注8)もなきさまぞしたまへる。内裏(注8)より参りたまへるなるべし、御前(注8)どもの気配(注8)あまたして、(薫)「昨夜、后(注8)の宮(注8)のなやみたまふよしうけたまはりて参りたりしかば、宮たちのさぶらひたまはざりしかば、いとほしく見(注8)たてまつりて、宮の御代(注8)はりに今までさぶらひはべりつる。今朝もいと懈怠(注8)して参(注8)らせたまへるを、あいなう御過(注8)ちに推(注8)しはかりきこえさせてなむ」と聞(注8)こえたまへば、(中君)「げにおろかならず、思(注8)ひやり深(注8)き御用意(注8)になん」とばかり答(注8)へきこえたまふ。

(注) 1 容貌——浮舟の容姿を指す。

2 かの人形——大君の身代わりのこと。

3 うち思ひ出でたまふ——中君が大君のことを思い出す様子を言う。

4 この客人の母君——浮舟の母君。

5 見たてまつらん——薰大将を見申しあげよう、の意。

6 宮——匂宮。

7 後の宮——匂宮の母、明石中宮。

8 懈怠——内裏に遅参したことを指す。

9 御過ち——匂宮を遅参させてしまった、中君の過失を指す。

## 問

(A) ——線部(1)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 利発そうな様子

2 柔らかな様子

3 しおらしい様子

4 恥じらないの様子

5 もの怖じしない様子

(B) ——線部(2)は、浮舟のどのような人柄を表しているか。最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 ひっこみ思案な人柄

2 幼い人柄

3 お転婆てんぱな人柄

4 奥ゆかしい人柄

5 気弱な人柄

(C) ——線部(3)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 ふしぎなほどかけ離れていることよ

2 ふしぎなほどよく似ていることよ

3 あきれるほど勝っていることよ

4 あきれるほど及ばないことよ

5 あきれるほど気おくれすることよ

(D) 線部(4)の現代語訳として最も適当なものを一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 このうえなく素晴らしい様子      2 非常に落ち着いた様子      3 高い身分にふさわしい様子

4 とても贅沢な様子      5 意外に地味な様子

(E) 線部(5)の意味を五字以内で記せ。

(F) 線部(6)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 匂宮が後の宮のお見舞いをしてしたこと      2 匂宮が薫の邸を訪れていたこと

3 匂宮が自邸を留守にしていたこと      4 薫が後の宮のお見舞いをしてしたこと

5 薫が匂宮の邸を訪れていたこと

(G) 線部(7)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 賢明に      2 人並みに      3 疎遠に      4 格別に      5 親しげに

(H) 線部(a)と同一人物を指すものを、~~~~線部(i)~(ホ)の「一人」の中から一つを選び、記号で答えよ。

(I) 線部(b)は誰の動作・行為か。最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 大君      2 中君      3 浮舟      4 浮舟の母君      5 薫      6 匂宮      7 後の宮

(J) 線部(甲)~(丙)はそれぞれ誰に対する敬意か。左記各項の中から最も適当なものを一つずつ選び、番号で

答えよ。

1 大君      2 中君      3 浮舟      4 浮舟の母君      5 薫      6 匂宮      7 後の宮

(K) 空欄□にはどんな言葉を補ったらよいか。最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 ざり      2 ざる      3 ず      4 ぬ      5 ね

【以下余白】